

吉沢 身江子

設計演習 I

第1課題

今、小学校建築は……。

第2課題

こどもはどこで遊んだらよ
いのか……。

3年1組

担当＝

関澤 勝一

第1課題

吉沢 身江子

町の中に“小さな町”を表現する。

今回選んだ小学校のある町“小布施”は、ある1ゾーンのみ景観を生かした一貫性のある街並み作りが成されている。

商業地域として利用され観光客も訪れるのだが、町全体の中ではほんの小さい1ゾーンのもつ特徴が小布施町全体の特徴として語られる。

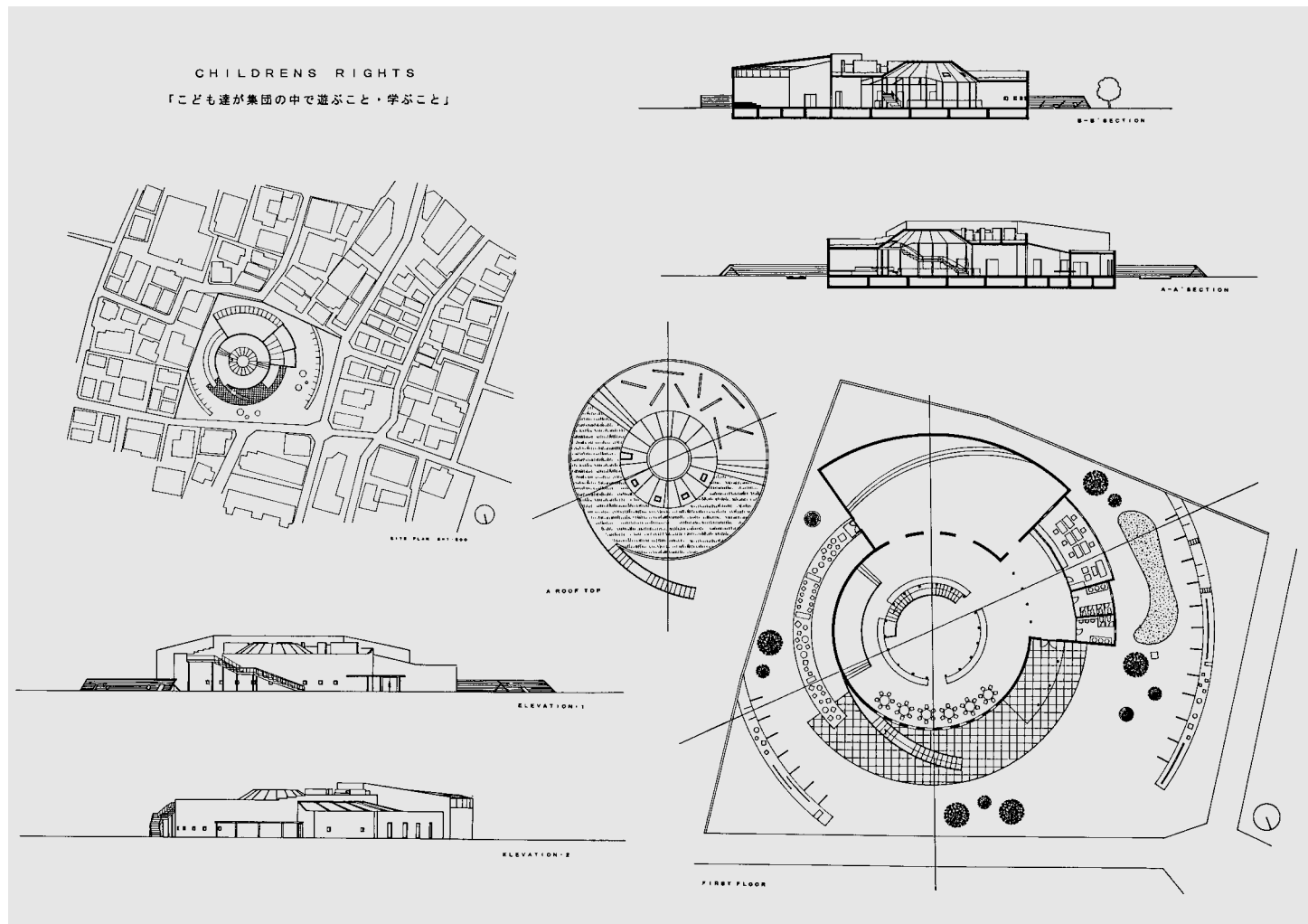
その1ゾーンを囲む道をそのま

ま敷地上に置き、“小さな町”を小学校の中に形成する。

地域ゾーンは、大通りを媒体にして左右幾つかに道が枝分かれしている。建物の一貫性はあるものの、その道毎にそれぞれの違った雰囲気をもつ。

“小さな町”は、大通りを小学校の軸となる大回廊に置き換え、そこから広がる回廊毎に、低学年ゾーン、中学年ゾーン、高学年ゾーン、特別教室ゾーン、各種ゾーンを配置する。

PLANは、特別教室、体育施設、多目的ホールなどの地域開放を考え、地域の人がアプローチしやすいよう、グラウンド、民家側に配置する。各教室間に半野外的な中庭を様々に配置し、回廊



のみの行き来ではなく、低・中・高・特別教室それぞれのもつ空間（庭）を自由に行き来できるように全体をまとめる。

指導＝関澤 勝一

この作品の特色は町の古い通りがつくりだす空間の構成をそのまま建築の中に移し替えたところにある。町を形づくる空間がそのまま縮小して建築の空間として成り立つか、これは見方の分かれるところであろう。一ついえることは、これは北海道から沖縄まで同じような建築でつくられている日本の小学校について「わが町の学校」であることを外から見る人に印象づけている。これは評価できる。出題

の「今、小学校は……。」の一つの建築としての解答である。最近の小学校建築は雑誌（ジャーナリズム）でとりあげられるケースが多くなっている。その理由は建築家が小学校建築をまじめに力を入れて取り組んでいるからである。バブルの時代には建築家はいそがしく小学校建築のような小規模（巨大なオフィスビルに比べて）なものに一生懸命にはなれなかった。今や、状況は一変した。教育とは何か、学校とは何か、建築家を含め大勢の人が論じている。この作品は現在の状況の中で意味がある。しかし欲を言えば、建築そのものの空間構成は未完である。子どもの学習、子ども

の遊びにとってどんな空間をつくるべきか作者の更なるスタディを期待している。

第2課題

佐藤 美和

計画地は杉並区高円寺の「高円寺南児童館」です。私がボランティアをさせてもらった児童館で、小学校低学年を中心に子ども達が通っています。ここで私が感じたことは、子ども達が「集団の中で遊ぶ」ということの重要さです。個別指導が進む教育現場や少子化の進む現代社会において、子ども達が集団の中から学びとる社会性や協調性は家庭や塾では得られないも

のです。今回私が提案する児童館には子ども達を管理するための「大人」はいません。子ども達に安全に遊べる「空間」を与え、その中で社会を形成し、ときにぶつかりながら集団の中で遊び学ぶことを様々な問題を抱える今の子ども達に提案します。

指導＝関澤 勝一

子どもの遊び空間には2種類ある。一つは「原っぱ」樹木が作りだす木陰、日あたり草の生えている明るい自然の土地、水たまりと土、はだしの子ども。もう一つは子どもの建築。子どものスケールに合った空間デザイン（現代風にいえばユニバーサルデザイン）子どもの遊びが

のびのびと展開できる空間。この作者は後者の種類である。私がこの作品を評価したのは作者がボランティアとして児童館（堅苦しくいえば児童福祉施設の一種、保育所をおえた子どもを対象とする）の中で子どもの遊びを自分の目で見たことである。「百聞は一見にしかず」ということわざには真実がある。私は建築の空間には真実（リアリティ）がなければならぬといつも考えている。この作品の中にリアリティがあるか図面からみれば少々不安がある。しかし私は作者が図面では表現をしていないが建築の空間として理解していると思う。そう信じたい。